



新年度ごあいさつ



病院事業管理者 丹野 弘晃
たんのひろあき

働き方改革の中での「働きがい」と「働きやすさ」を考える

上十三地域の医療介護福祉従事者の皆さん、今年度もよろしくお願ひ致します。働き方改革にしっかり対応しなければならぬ一年が、いよいよ始まりましたね。

そもそも、私たちは何のために「はたらく」のでしょうか？ その三要素とされているのが、①生計の維持、②自己実現（個性の発揮）、③他者貢献（社会貢献）と言われています。一説には、③に関連して「はた（傍）をらく（楽）にすること」と説明されることもあって、腑に落ちやすい解釈だと思います。

さて、労働と強く関連する経済学という学問は、1776年に出版されたアダム・スミスの「国富論（原題：諸国民の富）」によって体系化されたので、その歴史はまだ250年ほどしかないようです。当時の英国は、貿易によって国富の増大を目指す重商主義に価値を置いていました。このような時代背景の中で、スミスは諸国民の富という原題の通り、富とは何か、何が国民にとって富にあたるのかについて述べています。この中で、貴金属こそが富だと考える重商主義を批判し、富の源泉は人間の労働であるという「労働価値説」を唱えました。この学説が産業革命の理論的支柱となって、自由貿易主義へ繋がっていったようです。また、あの渋沢栄一も「論語と算盤」の中で、「その富を成す根源は何かといえば、仁義道徳、正しい道理の富でなければ、その富は完全に永続することができぬ。ここにおいて論語と算盤という懸け離れたものを一致せしめる事が、今日の緊要の務めと自分は考えているのである。」と述べています。一部の人が儲かるのではなく、国民みんなが儲かって、国全体も富む、というような高いレベルで「はたらく」ということを考えていました。ところがここに来て、ブルシット・ジョブ＝クソどうでもいい仕事、なる考え方が出てきました。これのミソは、働いている本人も己の仕事が他者貢献のない仕事のための仕事、と自覚していることです。今回のパンデミックによる経済停止で、社会的価値の高いエッセンシャルワークという必要不可欠な仕事が注目されたことも、その主張の背景にあるようです。

私たちの仕事は、ブルシット・ジョブの対極にあって、自己効力感や自己主体感を実感できるエッセンシャルワークであり、「働きがい」に溢れています。この原点を基盤に据えて、如何にそこに「働きやすさ」を加えていくか、その環境を整えていくか、これが働き方改革の本質と捉えています。これにより、エンゲージメントの向上を実現し、適応力のある地域中核病院として在り続けたいと思います。

新年度ごあいさつ



院長 たか はし みち なが
高橋 道長

ジャネの法則

新年度を迎え、ご挨拶を申し上げます。十和田市内で新型コロナウイルス感染症が発生してから2年が経過しました。認知症高齢者施設のクラスターに引き続いて、当院の院内感染も発生し、未知の感染症対策で、緊急事態を宣言したことが、遠い昔のように感じられます。時間の心理的長さは、年齢に反比例するという、ジャネの法則（19世紀のフランス人哲学者、ポール・ジャネ）が知られています。子供の頃は、人生に影響を与えるような新しいイベントに数多く遭遇し、1年が長く感じるが、年齢を重ねるに連れて、新しいイベントも減少し、時間の経つのが加速度的に早まってくるのが、普通の人生と言えます。しかし、この2年間に関しては、個人的には全くジャネの法則は当てはまりませんでした。院長になった時期に一致して新型コロナウイルス感染症のクラスターが十和田市内で発生し、その対応に追われた上、慣れない院長業務で、多くの失敗を重ねました。連日の会議でも方針が決まらず、十和田市内の医療施設との連携もままならず、発熱外来を新規に設計・建設し、なんとかハードを準備したものの、運営面では手探り状態が続き、コロナワクチン接種の対応にも四苦八苦していました。個人的には、昨年2月と本年3月の福島県沖地震で仙台の自宅マンションが東日本大震災を上回る規模で被災し、3月末には、まるで空爆されたウクライナ状態になった室内の後片付けのために、丸2日間家に籠っていました。この2年間は、控えめにみても、50代の4年にも5年にも感じられます。報道では、宮城県と福島県の多くの地震被災者が、心が折れそうになっているなか、頑張るしかないと明るく答えている姿に、こちらも元気づけられています。上十三地域は、地震による大きな被害が出ていないことが救いですが、大規模災害時には、当地域や当院自体が被災しなくとも、被災地域のバックアップが求められるので、常時対応できる体制を整えていくことが肝要です。

新型コロナウイルス感染症発生から1年後に、三沢市立三沢病院と地域医療連携推進法人を立ち上げてから、両院間の連携がより良好になり、コロナ感染患者の入院受け入れがスムーズになったのは良い知らせでした。しかしながら、オミクロン株による第6波は、全国的には収束の兆しが見えている中で、青森県は全く沈静化せず、3月17日に過去最高を更新して以降、高止まりしています。重症化や入院率は、これまでの株に比べてかなり低いものの、高齢者や合併症のある方が罹患すると、死亡することが少なくないので、感染の拡大は防がなければなりません。病院内では、院内感染や職員間の感染を防ぐための感染対策を重点的に行うことは可能ですが、家庭内感染や、飲食店・職場・学校内感染など、いわゆる地域の感染予防に対しては介入することが難しいのが現状です。大歓迎会は、もうしばらく我慢し、一般市民への3回目のワクチン接種と小児への接種を進め、今年こそ、官庁街通りの花見と流鏝馬を堪能したいものです。今年度もよろしくお願い致します。